

## Preface

### マンガ史料保存の最前線 ——原画ダッシュの開発

研究顧問 呉 智英

2019年10月12日～13日、関東・東北地方を中心に台風19号は甚大な被害をもたらした。死者・行方不明者89人、住居全半壊3万棟、その他、生活環境、交通、生産・流通なども大きく破壊された。

文化施設・文化資料もその例外ではない。当ミュージアムと交流のある川崎市市民ミュージアム（神奈川県）も大きな被害を受け、今なお休館状態である。同ミュージアムは地方史資料の他にマンガ資料も多数収蔵しているが、水に弱い資料であることを考えると、完全復旧への道は困難をきわめると危惧される。

同ミュージアム、また当ミュージアムほかの類似の文化施設の多くが、資料は地下倉庫に収納している。地下は温度差が小さく、紫外線の影響も受けにくく、建築上の費用も少なくすむ利点があるためだが、半面、浸水被害に遭うリスクもある。今回の台風ではその弱点が露呈するきっかけとなった。当ミュージアムも、海浜地区にあるわけではないとはいえ、巨大地震とそれに伴う親水の被害がないとはいえない。何かの予防的対策も考えておく必要があるだろう。

これとは別に、マンガ資料特有の保存・収納の持つ問題点もある。

まず、マンガ作品は毎週毎月歴大に発行され、すぐに収納の余裕がなくなることである。当ミュージアムでは、本館書庫の他にバックヤードとなる施設をいくつか検討している。しかし、将来これさえも満杯になることを考えれば、他ミュージアムのと資料共有共用を計画しなければならないだろう。これはまた各地での資料利用者の便宜ともなる。それぞれのミュージアムや図書館が所蔵する資料は地元の利用者が容易に見られるし、またそこにはない資料を取り寄せることもできるからである。

もう一つ、あまり気づかれないことであるが、

マンガ資料の耐久性のなさである。

マンガ作品は、紙と印刷インクで出来ている。普通の読者は、マンガを雑誌や単行本の形で所有し、時々読み返す。これを続けるうちに本が痛んでくることがあっても、30年や40年は読めなくなることはない。しかし、100年の保存となると、いくら丁寧に扱ったとしても、かなり困難なのである。

まず、紙質の問題がある。マンガが印刷される紙は、特殊な場合を除けば洋紙である。和紙は、古文書が保存さえよければ1000年以上残るように、きわめて耐久性が高い紙である。しかし、洋紙は印刷には適しているけれど、長期の保存に耐えない。特に読み捨てを想定した紙は、かなり保存状態がおくても、50年もすればボロボロになる。また、印刷インクの問題もある。単行本は別にして雑誌などは、紙質と相俟って、印刷の裏抜けが生じやすい。インクが紙を抜けて裏面にまで染み出し、裏ページが読みにくくなるのだ。これも30年ほどすると発生する。さらに、背割れ・ノド割れも起きる。用紙を綴じた糊が乾いて本が割れてしまうのだ。

これと同じことはマンガ原画でも当然起きる。原稿用紙にしろインクやマーカーにしろ、マンガ作品の単なる基礎材料にすぎず、耐久性の高い素材は使用されない。この点が油画や彫刻と大きく違っている。複製技術とかメディア芸術とか称される芸術分野の大きな特徴である。

しかし、マンガ原画は貴重な資料でもある。印刷されたマンガには現れない情報が刻み込まれている。ネーム（せりふ）の貼り跡、消しゴムの跡、印刷指示の青文字、さらには補強のためのセロテープ……、これらはマンガ家の苦闘をたどる資料でもある。小説などの原稿も、修正部分が多分という意味で重要な資料となる場合が多い。同時に、愛好家・マニアという人がマンガ原画を集め、オークションでも高額で取り引きされている。当然これは非公開資料となりがちで、研究者などの目にも触れない。そして、前述の非耐久性がある以上、100年200年後には単なるパルプくず

と化すおそれもある。

当ミュージアムでは、こうした原画の問題点を解決する方法として大日本印刷との協同事業「原画ダッシュ」を開発した。これは広義で言えば複製原画の一種であるが、その精密度においては大きく優っている。ルーペ等で拡大確認してもドット等がほとんど確認できず滑らかな階調が観察できる。ネームの紙厚の影さえもリアルに再現されているし、消しゴムをかけた後の原稿用紙のわずかなケバ立ちまで見ることができる。保存方法はデジタルであり、原本の他にコピーも作っているから、事実上永久資料となる。

難点としては、現時点で一枚の単価が高額であり、製作時間もかなりかかることが挙げられる。現在、重要作家の代表作などを中心にアーカイブ化を進めているが、展示会などでは高評を以って迎えられ、その意義が認められつつある。新しい技術による資料保存の大きな第一歩になっていると自負している。